琉球弧世界遺産フォーラム

News Letter

vol.11

2018・8 月

奄美・沖縄の世界自然遺産登録のゆくえなど

今年の世界遺産委員会は中東のバーレーンで 6 月下旬から 7 月初めにかけて開かれ、日本の「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されました。これで日本の世界文化遺産は 18 となります。この他にも 12 の文化遺産と 3 つの自然遺産、そして 3 つの複合遺産が登録され、世界遺産の総数は 1,092 にもなりました。

世界遺産の数が 1,000 を超えるかなり前から、その増え方が専門家の間で問題視されるようになっています。登録数が増えるに従い、世界遺産に相応しい保護のあり方がきちんと守られるか心配されるからです。この問題が今後の登録の足かせになるかも知れません。現に 2020 年の世界遺産委員会から、登録審議は各締約国につき 1 つに限られることが決まっています。

一方、今年の世界遺産委員会での登録決定の期待が大きかった「奄美大島、徳之島、沖縄島北部および西表島」の推薦書が委員会前に取り下げられ、再提出に向け仕切り直しになったことが大きな話題になりました。この問題については既に報道で知られるところですが、本ニュースレター誌で経緯や背景、対応措置など改めて整理し、今後の運びを見守る視点にしたいと思います。登録を達成した「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」がいったん推薦書を取り下げ、世界遺産委員会の諮問機関（イコモス）が問題視する点を修正し真摯に対応した点が、委員会で高く評価されたという。このプロセスが奄美・沖縄の自然遺産登録に向けた取り組みでも手本になるに違いありません。

さて、2020 年に登録 20 周年の節目を迎える「琉球王国のグスク及び関連遺産群」ですが、その適切な保存と活用に向けた取り組みのひとつとして、9 つの構成資産を対象とする包括的保存管理計画について前号で紹介がありましたが、この包括的な計画のもとで個別の資産、斎場御嶽の保存活用計画を南城市教育員会が平成 29 年度に策定されました。今号で、この計画についても紹介していただくことができました。

琉球列島の自然はとりわけ生物多様性に富んでいますが、身近なこの自然と密接にかかわりながらの島の暮らしは随分と変わってしまいました。人と自然が密接にかかわり合って共生した時代の知恵や規範の事例を今号から連載してもらいます。

イタリアはシチリア島に世界遺産を訪ねた紀行も寄せていただきました。

（琉球弧世界遺産フォーラム News Letter 編集担当記）

もくじ

世界自然遺産登録推薦書の取り下げとその後の流れ・・・・・・・・・・・花井正光　2
「斎場御嶽保存活用計画」の策定について・・・・・・・・・・・・・・・横山幸平　4
文明の十字路　シチリアの世界遺産・・・・・・・・・・・・・・・・・・・五藤克己　8
連載・人と自然の民俗誌　第1回　奄美・沖縄のハブも貴重な生物資源・・西江重信　12

発行：琉球弧世界遺産フォーラム（琉球弧世界遺産学会）

ryusefo@gmail.com

世界自然遺産登録推薦書の取り下げとその後の流れ

花井正光　（琉球弧世界遺産フォーラム代表）

IUCN による登録延期勧告

毎年、6 月から 7 月にかけて世界遺産委員会が開催されますが、何と言ってもそこでのハイライトは世界遺産一覧への登録可否の審議でしょう。登録に向け推薦書を提出している国であればなおさらです。今年は、日本が推薦書を提出していた「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が文化遺産登録を果たしました。これに先立つ今年 5 月 5 日、沖縄の地元 2 紙がそろって 1 面トップで、「奄美大島、徳之島、沖縄島北部および西表島」の自然遺産登録延期勧告の記事を大々的に載せ、今年の登録実現が遠退いた事態を県民に報せました。登録を心まちにしていた関係者にとって衝撃的なできごとでした。

ほどなく、国は提出した推薦書を世界遺産委員会前に取り下げ、2020 年の登録に向け再度推薦書を期限（2019 年 2 月 1 日）までに提出する方向で取り組みが始まっています。

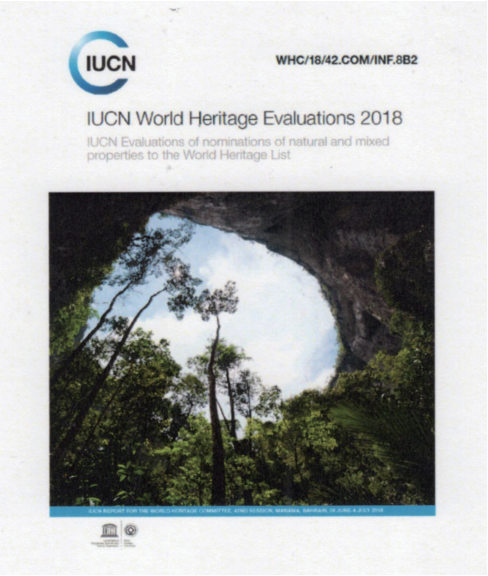


写真 1　2018 年 5 月初めに世界遺産委員会に提出された世界自然遺産等推薦候補地の IUCN 評価レポート

今回の登録延期勧告は、国際自然保護連合（IUCN）により世界遺産委員会宛てに報告された評価レポート (写真 1) の中で行われたものです。その概要は既に新聞等で報道されているところですが、ここで少し詳しく、また評価の仕組みや勧告後の動きについても合わせて紹介し、2020 年の登録に向け再び動き出した取り組みへの関心に繋げたいと思います。

IUCN と世界遺産の関わり

IUCN は多数の国、政府機関、NGO などで構成される国際的な自然保護ネットワークで、1948 年設立の民間機関でスイスに本部があり、野生生物の保護、自然環境及び自然資源の保全に係る調査研究等を行っており、絶滅危惧種のリスト（レッドデータブック）の作成・公表で広く知られています。

この IUCN は世界遺産条約に明記された諮問機関であり条約運用にも深く関わっています。IUCN が担う主な役割は、①締約国推薦案件の技術的調査および評価、②遺産登録後の管理・保全状況の評価、③保護管理人材の育成、④締約国へのコンサルテイングです。

2017 年 10 月、IUCN から 2 名の専門家が派遣され、登録推薦地の 4 島を訪れ、管理体制、保全状況、境界線などについての現地踏査や地域住民の意見聴取が行われたが、これが上記の①に基づく IUCN のミッションだったわけです。IUCN ではこの現地評価と並行して、分野を異にする 10 名程度の専門家が各自で評価するデスクレビューと称される組織が運営され、両方の評価を踏まえて作成され、世界遺産委員会に提出されるレポートが、5 月に話題をさらった件の勧告レポートそのものです。因みに、世界文化遺産の方は国際記念物遺跡会議（ICOMOS）が諮問機関に指定されていて、IUCN と同様の役割を担っています。

顕著な普遍的価値に係る評価項目	IUCN の評価
1．登録基準	
・基準　IX　（生態系）	不適合
・基準　X　（生物多様性）	適合（条件付き）
2．完全性に係る評価(作業指針)	
・完全性	不適合
・効果的な保護のための境界線設定	不適合
・脅威への対処措置	部分的適合
・連続性のある資産	適合
3．法的措置・保護管理	
・法的措置施行状況	適合
・保護管理	適合
・適切な緩衝域の設定	不適合
調査ミッションによる再度の現地調査	必要
IUCN としての評価・勧告 ： 登録延期	

表 1　奄美・沖縄の自然遺産についての IUCN による評価結果
評価レポート（2018）にある表を花井が意訳・改変

IUCN による登録延期勧告の概要

さて、奄美・沖縄の自然遺産に関する評価の内容をレポートから引用して見やすくしたのが表 1 です。この表から、世界遺産リストに記載（登録）する価値の評価は、①評価基準、②完全性に関する事項（完全性[注1]、境界線の設定、保全脅威への対抗措置、連続性の有無）、③法的保護措置（法的措置とその施行状況、保護管理、緩衝域の設定）について行われ、その評価結果が一覧できる。これらの評価結果を総合して登録可否に係る 4 つの評価[注2]（記載、情報照会、記載延期、不記載）が判断されますが、奄美・沖縄の自然遺産についての IUCN の評価は、表 1 の最後の行にあるとおり登録延期だったわけです。

レポートの最終章には勧告として以下の６つの事項が記載されています。

①構成要素の選定や連続性、種の長期的保護の可能性等について再考すること 。

②沖縄島の北部訓練場返還地を必要に応じ推薦地に統合する等必要な調整を行うこと 。

③土地所有者や利用者の管理への参画と私有地の取得等を進めること。

④奄美大島ノネコ管理計画の採択及び実施予定等、侵略的外来種の駆除管理の取り組みを評価し、推薦地の生物多様性に負の影響を与える他のすべての侵略的外来種を対象に拡大すること 。

⑤主要な観光地域において、適切な観光管理メカニズムや観光施設等、開発及び訪問者管理計画の実施を追求すること 。

⑥絶滅危惧種の状態・動向、及び人為的影響及び気候変動による影響に焦点を当てた、総合的モニタリングシステムを完成し採択すること。

推薦書の再提出に向けた取り組み

環境省を中心にして上記の勧告事項に応える何らかの措置を講じ、その内容を反映した推薦書を改めて提出する方向で具体的な取り組みが始まっています。そのひとつが沖縄島北部訓練場の返還地を国立公園に追加指定し、その後に自然遺産の推薦地域に編入する見直しが行われることになるようです。やんばる国立公園の追加指定は、去る６月 29 日付けで約 3,700 ヘクタールの編入を終えています。また、この追加指定により勧告事項にある、周辺に分断された飛び地の見直しについては一続きの推薦地域となることで解消されることになります。このことは、取り下げた推薦書にある沖縄島北部の推薦地域（図 1）と、国立公園の追加指定により拡大された新指定地の区域図（図 2）を並べてみると一目瞭然です。

他にも先の推薦書提出時に具体化していなかった保護管理や、観光客の入り込みによる自然環境の劣化や破壊の防止につながるエコツアーガイド制度の運用が沖縄島北部３村で今年度からスタートしたし、今年度になって西表島で観光ガイドの登録制度に向けた条例制定の検討を竹富町が始めており、世界自然遺産登録後の保全と活用に必要な社会環境の整備が進みつつあります。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、推薦書を取り下げ、諮問機関の指導も得て資産の構成や価値の見直しを行った経緯があり、その取り組みが世界遺産委員会で高く評価され登録を果たしました。この例に倣って、奄美・沖縄の自然遺産も 2020 年の世界遺産登録を目指し必要な準備を急ぎたい。

図１ 取り下げた推薦書にある世界自然遺産登録候補地の区域図。周辺に隔離された小規模な飛び地 (赤枠の囲み) があり、見直しの必要性を IUCN 勧告が指摘。　　出典：環境省報道発表資料

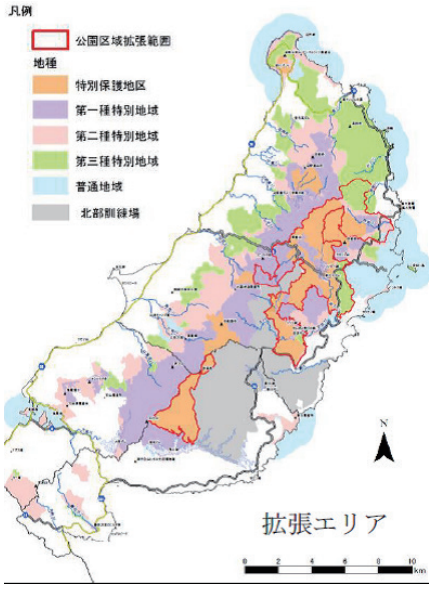


図２　北部訓練場返還地に指定地（赤枠線）が拡張されたやんばる国立公園。　図１の隔離された飛び地が国立公園の拡張で解消できる。　出典：環境省報道発表資料

注１）完全性とは、当該資産の特質がすべて包含されている度合いを測るものさしで、次の条件をどの程度満たしているかにより評価される。①資産の価値の構成要素がすべて含まれているか。②資産の特徴を不足なく示す広さが十分に確保されているか。③開発や管理放棄による負の影響を受けているか。　出典：文化庁ホームページの記述をもとに一部を改変。

注２）①記載：世界遺産一覧表に登録。②情報照会：追加情報の提出を求めた上で、次回以降に再審議。③登録延期：より綿密な調査や推薦書の本質的な改定が必要（推薦書の再提出後、約１年半かけて再度 IUCN による審査を受ける）。④不記載：登録にふさわしくないもの（世界遺産委員会で不記載決議となった場合、例外的な場合を除き再推薦は不可）。出典：環境省報道発表資料をもとに一部を改変。

「斎場御嶽保存活用計画」の策定について

横山　幸平　（沖縄県南城市教育委員会史跡整備係）

1. はじめに

斎場御嶽　三庫理

斎場御嶽は昭和 30（1955）年 1 月 7 日に琉球政府の史跡、名勝指定がなされ、日本復帰後の昭和 47（1972）年 5 月 15 日に国指定史跡となりました。

指定当時、戦後数十年を経て放置されたままであった参道は所々損壊し、戦争による岩塊や樹木が参道を遮るなど、通行にも支障をきたしている状況でした。このような状況を早急に解決して欲しいという声が高まり、それに応える形で平成 4（1992）年度に『知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画』が策定され、平成 6（1994）年度より整備事業が開始されました。整備事業では、不発弾・岩塊の撤去、発掘調査、動植物調査、参道等の整備、説明板の設置等が行われ、誰もが斎場御嶽を訪れることのできる環境が整えられました。

このような整備が進むと平行して、斎場御嶽は沖縄の歴史文化を物語る遺産として、観光や地域振興の担い手ともなってきました。そして、平成 12（2000）年には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成資産として世界遺産に登録されました。

2. 保存活用計画策定の背景と目的

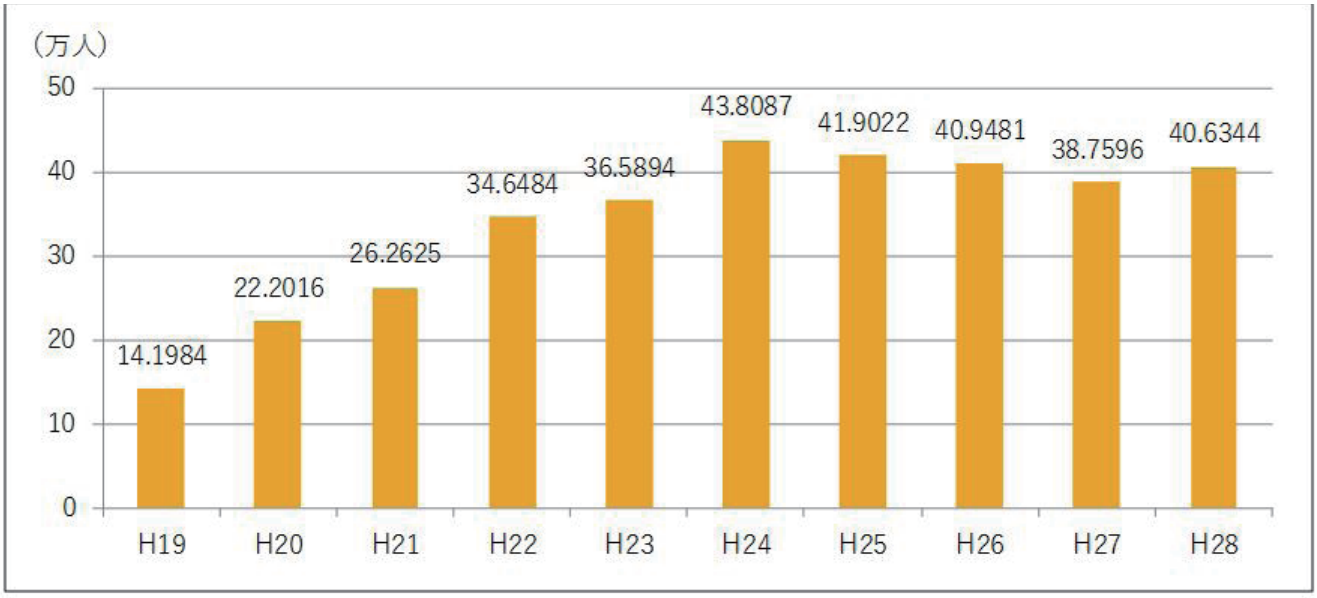
世界遺産登録後、斎場御嶽への来訪者は増加傾向にあり、近年は毎年 40 万人に上ります。聖地への巡拝だけでなく、癒しや健康増進をかねたレクリエーションとして活用されるようにもなりました。

しかし、一方で、来訪者の増加による風致の乱れや自然生態系への影響が懸念されるようになったことから、駐車場の移転や御嶽内への立入りを制限する休息日の導入、参拝時のマナーの周知徹底等、活用のコントロールにも取り組んでいます。

世界遺産登録後 10 年を経過した平成 24（2012）年には、『「琉球王国のグスク及び関連遺産群」包括的保存管理計画』（以下、『包括的保存管理計画』）が策定され、世界遺産として相応しい周辺環境を含めた保存管理、活用を行う、という方向性が示されました。また、平成 27（2015）年度に「沖縄県世界遺産保存活用推進協議会」が設立され、一体の世界遺産として各市町村が連携した取組みを強化する動きが始まっています。

このように、昭和 47（1972）年の史跡指定から 44 年が経過し、一定の整備事業が完了して以降も、斎場御嶽を取り巻く状況は大きく変化し続けています。沖縄第一の聖地、史跡、世界遺産、観光・地域振興の担い手、という多様な側面を持つ斎場御嶽について、行政、県民・市民、観光客など様々な関係者が知り、守り、磨き、活かすために、斎場御嶽の保存と活用に関する事項を明確化することが望まれておりました。

そこで、斎場御嶽の現状を整理し、適正な保存･活用を図ることを目的に、平成 28 年度から平成 29 年度にかけて、文化庁補助事業を活用し、『国指定史跡　斎場御嶽保存活用計画』を策定しました。



斎場御嶽の来訪者数の推移（年度）

3. 斎場御嶽の本質的価値の整理

斎場御嶽の国史跡指定理由及び世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成資産としての価値、さらに現代の地域住民にとっての歴史文化的価値を踏まえて、斎場御嶽の本質的価値を整理し、斎場御嶽の保存活用の目標･将来像を以下のように定めました。

斎場御嶽の本質的価値

・琉球の開闢神「アマミキヨ」が創設したとされる御嶽の一つであり、琉球王国時代には国王の巡幸や、聞得大君の御新下りといった国家的な祭祀が行われた、琉球王国を信仰面、精神面から支えた琉球王国第一の聖地。

・民間による東御廻り等の行事によって、現在では、地域のみならず広く県民の信仰の対象（“ 祈りの場 ”）として沖縄第一の聖地。

・琉球地方独自の自然観に基づく信仰形態を表す拝所と樹林や巨岩等の自然環境が、今なお信仰の継続により聖地として継承されている稀有な物証。

斎場御嶽の保存活用の目標・将来像

・地域住民、市民、県民及び国内外からの来訪者から、琉球王国及び現在の沖縄の最高の聖地として認識され、琉球地方独自の信仰形態を表す拝所及び自然環境と一体となった神聖な景観が、沖縄の精神文化を表徴する “ 生きた文化的景観 ” として、“ 信仰・祈りの場 ” として継承されることを目標・将来像とします。

4. 斎場御嶽の保存管理・活用・整備の基本方針

上述した本質的価値を守り、目標・将来像を具体化するために、保存管理・活用・整備それぞれについての基本方針を定めました。

保存管理の基本方針

基本方針１：琉球地方独自の自然観に基づく信仰形態を表す、自然環境と一体となった拝所を保存する。
基本方針２：斎場御嶽周辺の自然環境を、斎場御嶽として一体的に保全する。
基本方針３：琉球王国時代の国家的祭祀、民間による東御廻りを伝える歴史文化資産を保全する。
基本方針４：本来の聖域の範囲の調査研究を推進し、必要に応じて追加指定を行う。

活用の基本方針

基本方針１：聖地としての風致の保全を第一義とし、信仰の継続を妨げないための来訪者管理を行う。
基本方針２：周辺の歴史文化資源との一体的な活用を行うことで、斎場御嶽の同時集中利用を分散するとともに、地域全体の活性化に寄与する。
基本方針３：斎場御嶽と密接に関連する文化財との連携ネットワークを構築する。
基本方針４：沖縄の精神文化を表徴する“生きた文化的景観”を持続的に活用するため、多様な主体と連携する。

整備の基本方針

基本方針１：真実性を担保しつつ、自然現象による影響を低減するため必要な整備を行う。
基本方針２：観光等人為による影響を防止するため必要な整備を行う。
基本方針３：神聖な空間の性格を尊重し、必要最低限の活用のための整備を行う。

以上の３つの基本方針を立てることで、斎場御嶽に関わる各組織が共通認識を持って斎場御嶽の保存管理・活用・整備を行うことが出来ます。

5. おわりに

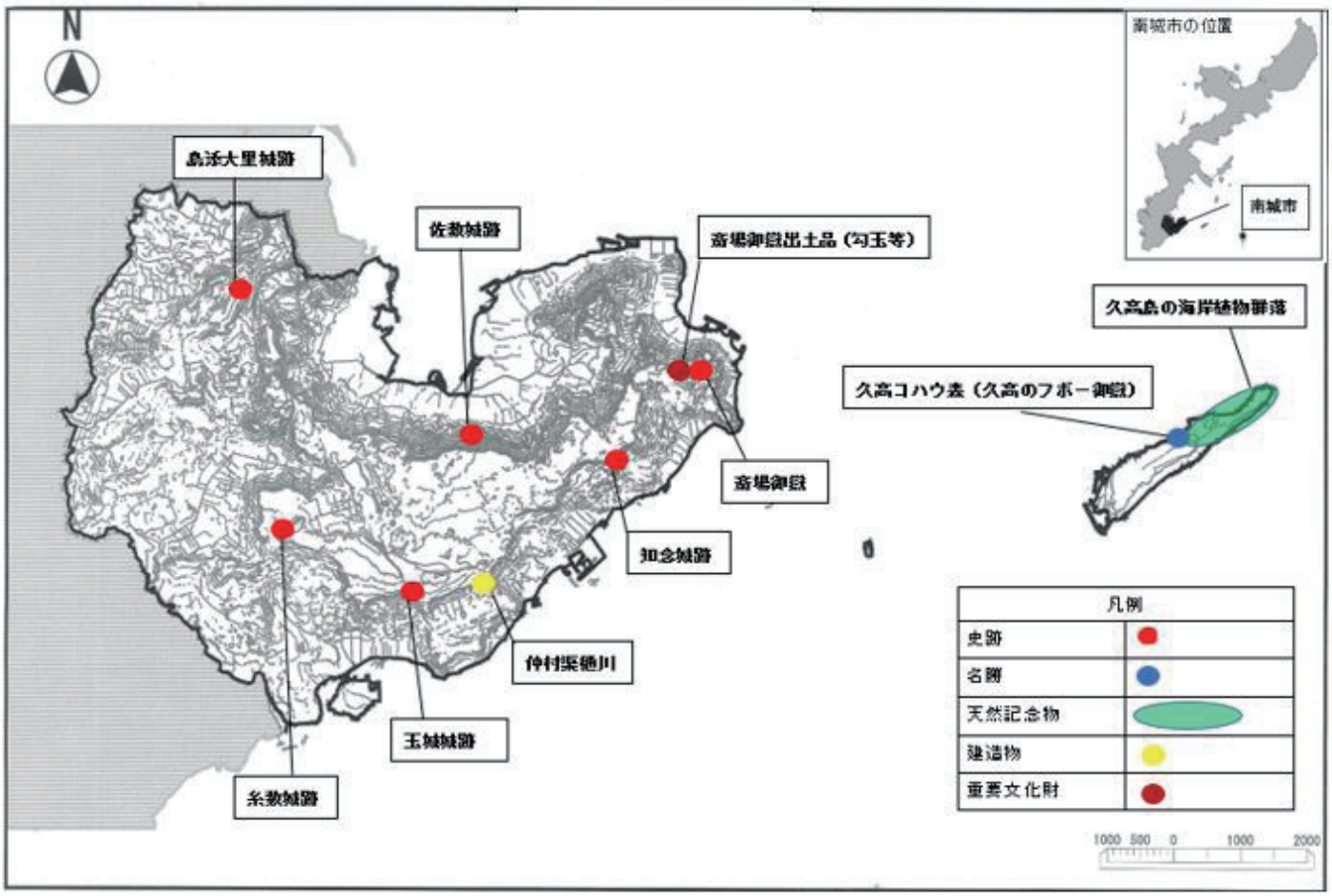
世界遺産に登録され本年度で 18 年目になります。登録されてから来訪者の数は増加傾向にあり、資産への影響が危惧されておりました。実際オーバーユースにより、石畳が磨耗するなどの問題も発生しておりました。今回保存活用計画を策定し、今後の保存・活用・整備の方針が決まったことで、課題解決に向けた取り組みを進めていくことが出来ると考えています。

平成 32（2020）年には世界遺産登録 20 周年を迎えます。斎場御嶽がその本質的価値を維持し、計画書の中で挙げた目標・将来像に近づけるように努力していく所存です。

南城市の文化財

最後に斎場御嶽の保存活用計画から話は変わりますが、南城市内の文化財について少し触れさせていただきたいと思います。南城市内には国指定文化財が 10 件、県指定文化財が 7 件、市指定文化財が 54 件あります。沖縄県内でこれほど指定文化財が所在している市町村はあまりありません。世界遺産の登録により斎場御嶽への観光客数が増えている状況にありますが、斎場御嶽だけでなく、市内の文化財を周遊出来る仕組み作りやルート作りを考えています。

南城市は「琉球開びゃくの地」「民と農業のはじまり」「統一王朝のはじまり」「国家儀礼のはじまり」等様々なはじまりのストーリーがある文化財が所在しています。南城市に来られた際には、これらのストーリーをたどりながら文化財を見てまわるとより楽しく文化財をまわれると思います。ぜひ 1 度南城市を訪れてみてはいかかでしょうか？



南城市の国指定文化財一覧

糸数城跡

久高島の海岸植物群落

文明の十字路　シチリアの世界遺産

五藤　克己　（元文化放送記者）

地中海の地図でシチリア島を眺めると、その地政学的位置がよく分かります。地中海のほぼ中央に位置し、しかも最大の島（面積は九州の約３分の２）であり、交通と通商の要地です。歴史を大まかにたどると、ギリシアの植民都市、カルタゴの支配、ローマ帝国の属州、ゲルマン人の支配、ビザンツ領、イスラムの支配、ノルマン王国、フランスの支配、アラゴンの支配、スペイン領と、近代イタリアの統一まで、民族も言語も宗教も文化も異なる支配者が交替してきました。日本人の私は茫然としてしまいます。当然、いくつもの文明が重層的に交錯していて、「文明の十字路」と言われています。

現在はイタリアのシチリア自治州、州都はパレルモです。過酷な歴史から縁遠い現代の旅人からすると、尽きせぬ魅力に満ちた不思議な世界となります。

異文化の入り混じったパレルモ

パラティーナ礼拝堂

島の北の玄関、パレルモはシチリア州最大の都市で、商工業の中心地です。1787 年、ドイツの文豪ゲーテは、パレルモから出発して約 40 日かけて島内を旅行しました。彼はパレルモを「世界一美しいイスラムの都市」と称えていますが、イスラムだけでなく、各時代の歴史モニュメントが市内の随所に残されています。パレルモの街を歩いていると、時折、奇妙な感覚に捉われます。異文化が入り混じっている街並みに、「今自分はいったい、どこにいるのだろうか」と戸惑ってしまうのです。いわば ” 異文化酔い ” のようなものです。

世界遺産の面では、ノルマン人のシチリア王国全盛時代に造られた独特のアラブ・ノルマン様式の建造物合わせて 9 件が、2015 年に世界遺産に指定されています。写真はノルマン王宮のパラティーナ礼拝堂内部のモザイク画です。

アグリジェントの「神殿の谷」

アグリジェント（島の南岸）の近郊には、海を臨む見晴らしのいい丘の上に、ギリシア時代に建造された神殿群が立ち並ぶ「神殿の谷」があります（1997 年に文化遺産登録）。遺跡を辿って歩くと、古代ギリシア時代にタイムスリップします。

エルコレ神殿

コンコルディア神殿

エルコレ (ヘラクレス) 神殿は紀元前 520 年の建造です。その後の地震で倒壊し、現在の姿は 1924 年にイギリスの考古学者ハードキャッスル卿によって復元されたものです。

保存状態が良好なのはコンコルディア神殿です。紀元前 450 ～ 440 年ごろの建造で、前面 6 柱、側面 13 柱のドーリス式（ドーリア式）の円柱が、ほぼ完全な姿で残されています。（保存状態がいいのは初期キリスト教時代に、聖ペテロ・パウロ教会に転用されたためで、歴史のアイロニーを感じさせられます）

神殿の石材は、カルカレニーテという石灰岩の一種です。建造時は漆喰で白く塗られていましたが、長い年月で剥落し、現在は独特の薄茶色になっています。丘の上に立つ神殿は、洋上からもくっきりと望め、島に近づく船乗りたちの目に真っ先に飛び込んできたことでしょう。シチリアの強烈な強い日差しのもと、抜けるような青空をバックに、白く輝く神殿の姿は、船乗りたちにどれほどの畏敬の念を抱かせたことでしょうか。

シラクーサの考古学公園

ギリシア時代にアテネと同じくらい栄えたシチリアの古都シラクーサ（島の東岸）は、有名な古代の科学者アルキメデスを生んだ町であり、また太宰治の小説「走れメロス」の舞台となった町でもあります。

ネアポリス考古学公園には、収容人員 1 万 5 千人のギリシア劇場（現在でも古代劇の上演などが行われている現役の劇場）や、古代ローマの円形闘技場など、数多くの古代遺跡があります。たくさんの石切り場も残されており、中でも「天国の石切り場」の「ディオニュシオスの耳」と呼ばれる洞窟が有名です。大きな耳の形をした洞窟で、高さは 23 mに及びます。音響効果が優れており、観光客は手をたたいたり、叫び声をあげて、そのエコーを楽しんでいました。一人の個人ガイドが皆を静めさせて、壁に向って囁くように唄い始めました。すると不思議なことに、哀調のある唄声が洞窟いっぱいに響いてきました。あの時は本当に驚きました。ガイドの声は直接には聞こえないのに、唄声は洞窟中を満たしているのです。今でも、あの唄声を記憶に蘇らせることができます。こういう経験は、旅を忘れがたいものにします。

ディオニュシオスの耳

広大な世界遺産「ノート渓谷のバロック都市」

1693 年に発生した大地震により、ノート渓谷（島の東南部）一帯は壊滅的な被害に見舞われました。その復興・再建の過程で、カターニア、ラグーザ、ノート、カルタジローネなど多くの町が、後期バロック様式で統一された美しい街並みに生まれ変わりました。これらの町々は都市計画の重要性を示すとともに、独創的な風景を作り出しているとして、2002 年に 8 つの街並みが、まとめて世界遺産に登録されました。私が訪れたいくつかの町を紹介しましょう。以下、専門的な部分は、イタリアの建築・都市史の専門家、陣内秀信氏の「南イタリアへ！地中海都市と文化の旅」に啓発されながら記述します。

丘に広がる二段の町、ラグーザ

ラグーザは、地震の後、都市計画により誕生した高台の町、ラグーザ・スーペリオーレと、古代から発展し中世の面影を残す下の町、ラグーザ・インフェリオーレという、二つの区域に分かれます。いずれもバロック様式の建物が街を彩り、特徴ある街並みを現出しています。

写真は二段の町の境界域から、下の町の街並みを俯瞰したものです。

ラグーザの下の町の眺め

ニュータウンとして建設されたノート

地震の後、ノートの人々は壊滅した古い町を捨て、6キロほど離れた新天地に計画的な都市を建設しました。陣内氏によれば、ノートには演劇的な都市空間が3つ配されていると言います。中でもこの町のカテドラルにあたるサン・ニコロ教会前の広場の大階段は、「教会前の都市空間をこれほど劇的な舞台として強く意識した例は、イタリアでもシチリアのこの地方にしかないだろう」と絶賛しています。

カテドラル前の階段状広場

私が訪れた時は、この階段状広場で、地元の高校生が目の前の市庁舎に向けて、学校改革を訴える集会を開いていました。

横断幕には「こんなんじゃダメ、素敵な学校を！」というスローガンが書かれ、トラメガでの演説に拍手が起こり、シュプレヒコールをあげます。険悪な雰囲気は全くなく、何か微笑ましい光景でした。現代の高校生が、広場を劇的な舞台として見事に活用していることに感心しました。

陶器細工の町カルタジローネの大階段

内陸の丘の上に広がる高台の町カルタジローネは、イスラム支配の時代から陶器作りが盛んでした。旧市街を歩くと、陶器を巧みに生かした色彩豊かな景観に出会います。市民庭園を囲む外周には、優美な壺や街灯の装飾などの陶器作品が並び、公園を特色づける巧みな演出となっています。

市庁舎前広場からサンタ・マリア・デル・モンテ教会へと伸びている142段のスカーラ（大階段）は、その規模の大きさと色鮮やかさで、仰ぎ見るものを驚かせます。階段の蹴上がりに施されたマジョルカ焼きの装飾と、遠近法的な視覚効果によって、スカーラはまさに天国へと続く階段を思わせます。

ライトアップされた夜のスカーラは、静かで深い威厳が備わります。また、毎年7月の「聖ジャコモの祭り」の際は、階段の上にキャンドルのイルミネーションが灯されます。私は写真を見ただけですが、その幻想的な世界は十分に想像できます。

市民庭園の陶器装飾

スカーラの陶器装飾

噴火活動を続ける活火山、エトナ山

エトナ山（島の東北部）は、約 60 万年前から絶えず活動を続けてきたヨーロッパ最大の活火山で、現在でも噴火活動が盛んです。近年でもたびたび大噴火しています。標高は噴火の度に高さが変わります（資料によって異なりますが、現在は 3,329 mとされています。）。いずれにしろイタリアのみならず、地中海で最も高い山です。

2013 年に自然遺産として世界遺産に登録されました（同時に登録された富士山は文化遺産）。

観光的には、バスとロープウェイとミニバスを乗り継いで、標高 2,920 mまで行くことができます（さらに特別許可を取って、ガイド付きで頂上へも登ることができます）。ミニバスを降りてからは歩いて、火口跡の一つに行きました。火口跡の外縁を一周できるし、火口の中に降りて行くこともできます。まずは外縁を一周しましたが、身体がよろけるほどの強い冷たい風が吹き付け、恐怖心に捉われます。写真を撮るにも身体が不安定なので、這いつくばって必死に撮影しました。火口の中に降りて行くと、周囲の火口壁に守られて風は弱まり、かじかんでいた手も元に戻りました。溶岩の小石ひとつを拾って、記念に持って帰りました。

山麓から見上げるエトナ山

火口跡とエトナ山周囲の光景

シチリアの奥深さ

シチリアの世界遺産を駆け足で紹介してきました。シチリアには 7 つの世界遺産があります。本稿で取り上げなかったところもあり、まだ私が訪れていないところもあります。そして世界遺産といえども、シチリアの魅力の一端にすぎません。世界遺産ではありませんが、旅人を魅了する地は、たくさんあります。ゲーテは「シチリアなしのイタリアでは、ぼくらの心の中にいかなるイメージもつくりえない。シチリアにこそすべてを解く鍵がある」と、「イタリア紀行」に記しています。

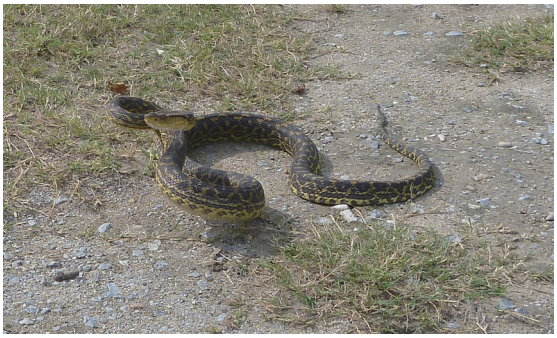
シチリアの各地で出会った忘れがたい人々の表情が浮かんできます。あり得ないほどの親切な振る舞いにも恵まれました。ある村でたまたま合ったお爺さんが、私が日本人であると知ると、「俺はシチリアーノ（シチリア人）だ。イタリアーノ（イタリア人）じゃないよ」と、深い皺の笑顔を浮かべて言いました。私はその後の旅で、お爺さんの言葉の意味をあれこれと考え続けました。

連載　人と自然の民俗誌　第１回

奄美・沖縄のハブも貴重な生物資源

西江　重信　（環境カウンセラー）

ハブはいきなり咬みつくから怖い、憎ったらしい。いきなりとはいってもハブに気づかず近づきすぎるからです。ハブが人を追っかけて襲うことはない。距離を保っていれば彼等は退散するのです。怖いハブでも田舎の道で、車に轢き殺されているのをみるとその美しさに見入ってしまいます。黒と黄の配色の妙、計算しつくされたような繊細な紋様はまるで、竹久夢二の世界を想起させます。ウロコの数が他のヘビ類に比べて圧倒的に多く毒牙は完ぺきな注射針になるようになっている。俊敏な動きを可能にする骨格と筋肉。それらの特質は天敵の多い大陸で生き抜くために進化させたのでしょう。数百万年の歴史を有し、今では琉球列島だけに棲む毒蛇の一種です。彼らは大陸から切り離された中琉球の島々の成り立ちの証言者なのです。



伊平屋島　　瞬時に攻撃態勢をとる。バネの効いた構えはアスリートの躍動のよう

伊平屋島　　黄金のハブ＝アルビノ
※高額買い取りを拒否して７年間飼養した名嘉恒男氏に敬意！
残念なことにアルビノハブは死んでしまったが

貴重なジビエ　上品なスープは「秘薬膳」

ハブを殺したのならありがたく食しましょう。昔はおそるおそる食べても来ました。ハブ汁仕立てにして。食べる時は必ず部屋の外で食べていました。屋外で食べる理由は定かではないが、家の中で食べると仲間が恨みを晴らすために家に侵入するという不確かな不安からだったのかもしれません。昔食べたハブ汁がそんなに旨いものだったという記憶はない。ところが近年、ある種の義務感から食べることにしたところ、これがまた、この世のものとも思えないコクのある上品なスープに仕上がることに気づきました。それこそ得難いジビエ膳で、私は「秘薬膳」と言っています。

可能性を秘めた資源　住み分けのしくみづくりを

ハブ毒は蛋白毒です。人類にとって有用な物質を抽出・創り出せるものと思っています。中国では古代から毒ヘビの脂を薬として利用してきました。沖縄においても戦後一時期まで脂が薬として売られていました。

唐突だが、ハブが極端に数を減らすのではないかと気になります。行政的に捕獲が認められ、撲殺の文化がある社会においてハブは絶滅の危機を迎えるかも知れません。ハブと人間の日常生活圏との住み分けのしくみを探さなければと思うのですが・・・。ちなみに、私たちグループエコライフでは＜農地を含め人間の居住域に侵入したハブは殺す。山で遭遇するハブは見逃す＞。これを、単純だが自主ルールにしています。

トピックス　猛毒ハブが無毒アカマタに喰われる話

『アカマタはハブを宥め賺して呑みこむ』、という目撃談を聞いていたのだが、僕自身はそのような現場を見たことはなかった。右写真はアカマタが毒ヒメハブを呑みこんでいるところ。被害者はハブではなくヒメハブだが、ハブもアカマタに喰われることが納得できた。逆の話は聞いたことがない。

写真提供：伊平屋島大嶺博氏

次号は、「野の菜物語」として、沖縄の食文化についての話をします。